

チェック!

ワクチンの上手な利用で 病気を予防しよう



今回のテーマは
ワクチンによる
病気の予防
についてです。

当誌へのアンケートハガキの中で「繁殖牛や子牛のワクチンと予防接種事例について教えてほしい」というご要望がありました。質問をいただいた方には返信いたしましたが、読者の中には同様の要望をお持ちの方もいらっしゃると思います。そこで、今回はワクチンについて解説します。

●知っておきたいワクチンの種類

まず、言葉の定義を簡単に説明します。「予防接種」とは、病気にかからないようにあらかじめ免疫をつけさせることです。このときに接種するものが「ワクチン」です。病原性が弱くなった微生物を用いた「ワクチン」を「生ワクチン」、あらかじめ殺した微生物を用いた「ワクチン」を「不活化ワクチン」といって区別しています。そのほかに、病原菌の毒素を加工した「トキソイドワクチン」というものもあります。いずれも、家畜に免疫をつくらせて、その病原微生物に感染しても発病などの被害を抑えることを目的としています。繁殖生産の場合は、母牛と子牛のそれぞれで適切な予防接種が必要です。

●母牛の死産や子牛の奇形を防ぐ

妊娠時の流産・関節湾曲症を引き起こすアカバネ病や、子牛の小脳形成不全の原因となるチュウザン病などは、蚊によってうつります。流行地域では、蚊が発生する前の、毎年4～6月までに予防接種を済ませておきます。

●子牛の下痢を防ぐ

大腸菌による子牛の下痢が問題である場合は、妊娠牛に大腸菌の不活化ワクチン(写真①)を接種します。ワクチン接種により、妊娠牛は大腸菌に対する免疫がつくれ、初乳に蓄えられます。この免疫を大量に含む初乳を飲むことで、子牛の大腸菌の下痢が予防されます。初乳をしっかり飲ませることが重要です。

●子牛の肺炎を防ぐ

牛伝染性気管支炎、牛RSウイルス感染症、牛パラ

インフルエンザなど、ウイルス性の風邪に対しては数種類が混合された「多価ワクチン」というものが主流になっています。子牛の肺炎(写真②)の予防には、ワクチンの2回接種を勧めます。クリニック検査でどのような病気が何ヵ月齢で子牛に感染しているのかを確認し、接種するワクチンの種類や接種月齢を決めていきます。

さらに飼養規模、飼養形態、離乳日齢なども考慮して、農場ごとのワクチン接種プログラムを作成します。マンヘミア・ヘモリチカというバイ菌も肺炎の原因になりますが、ワクチンが市販されています。病気になった子牛の鼻汁のクリニック検査(写真③)でこのバイ菌が分離された場合には、マンヘミアのワクチンの使用も検討してください。

●日頃の衛生管理がなにより大切

以上のワクチンが、日本の繁殖生産で病気を予防するために必要と考えられるワクチンです。ほかにもさまざまなワクチンが市販されています。地元の獣医などと相談のうえ、地域や農場に合ったワクチンを使用してください。

なお、哺乳牛を多頭飼育する農場での肺炎ワクチンの使用例が、当誌64号8～9ページに記載されていますので参考にしてください。最後に、病気の予防はワクチンに頼りすぎることなく、日頃の衛生管理が最も重要であることも忘れないようにしましょう。



①牛用大腸菌ワクチン ②肺炎で発育不良の子牛(5ヵ月齢) ③綿棒を使った鼻汁の検査